

2012年作品・長篇ドキュメンタリー映画(カラー)
(114分)

陸軍全戸研究所

監督・編集・楠山忠之

七〇年の戦争を裏で支えた
秘蔵兵器・謀略戦の兵器開発基地
極秘だったため「消された研究所」ともい
今、関係者がカマラの前に立って証言する。

殺人兵器
電波兵器

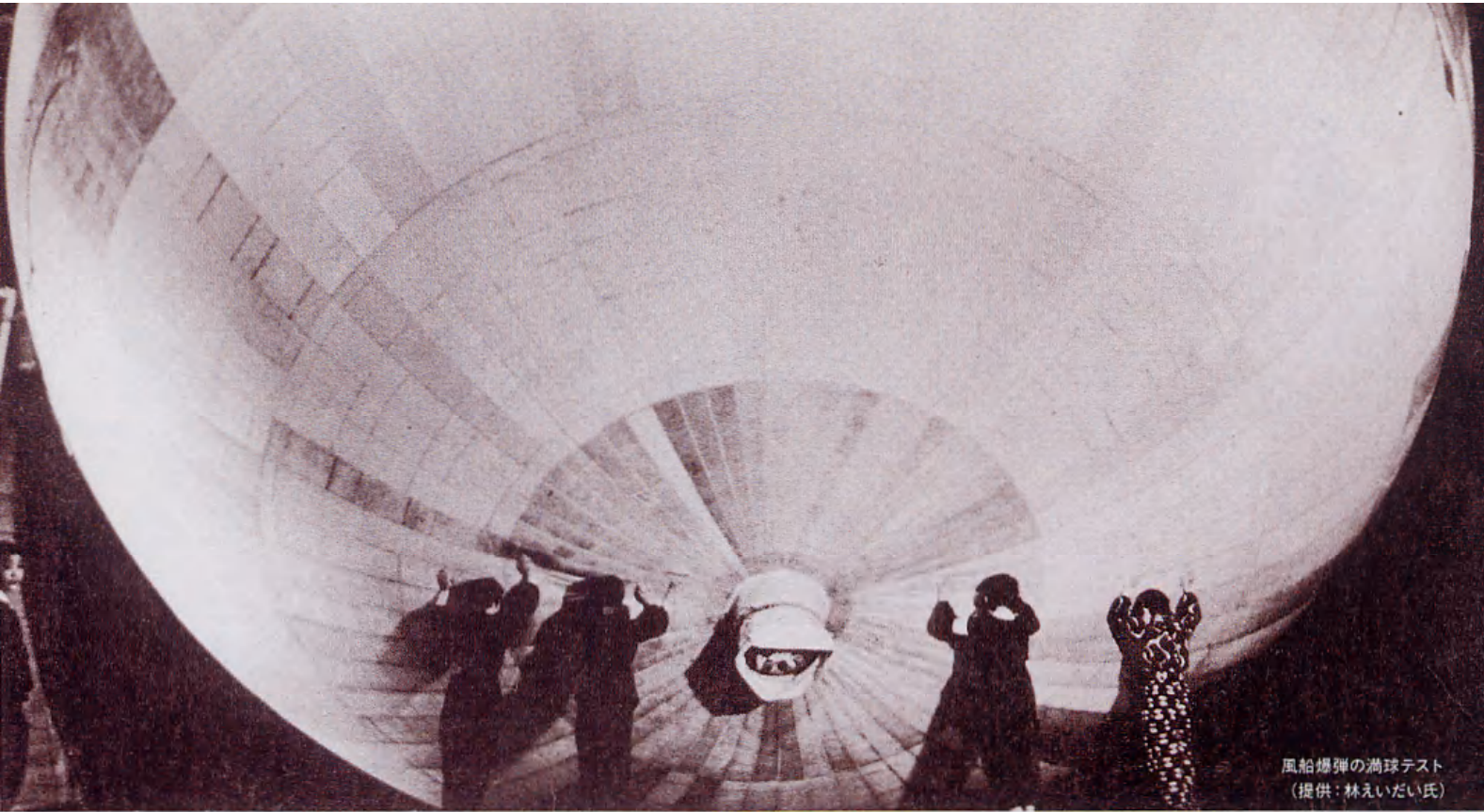
生体実験の道
毒物爆薬の研究

風船爆弾
生物・化学兵器

二セ札製造
外交経路謀略



原案 / 日本映画学校「人間研究」
製作 / アジアディスプレイ
宣伝・配給 / 陸軍全戸研究所映画製作会



風船爆弾の満球テスト
(提供: 林えいだい氏)

東京新聞 (2006年8月30日付)
取材・撮影開始から3年間は日本映画学校生たちが担う



殺人光線や電波兵器、爆薬の開発。毒薬による人体実験。渡洋爆撃の代案としての風船爆弾。中野学校(スパイ養成所)と組んでの対支謀略作戦における偽札製造。

陸軍科学研究所の中でも最も莫大な資金を与えられ、新兵器の発案に期待を託された「登戸研究所」。1937年12月、南京占領と相俟つかのように川崎市生田の丘陵地に研究棟を建て、敗戦の日まで極秘のベールの中で資源なきニッポンの戦争に智力で勝とうとした。

戦争は誰のために 続けたのか

登戸研究所の闇を辿る本作から、
囷らずも原発ムラと相似する構図が浮かぶ

スーツ姿や平服。サラリーマン生活そのものの研究所。だが仕事は「人殺し」や謀略のための兵器づくりだ。戦場から遠く隔絶したこの地に血の匂いはなかった。近隣の寒村からじっちゃんばっちゃんまでもが、現金収入を求めて集まって来た。徴用逃れの道でもあった。戦後、証拠湮滅命令で「消された秘密研究所」と言われてきた。歴史の闇に光を当てるべく、2006年から少なくなった当事者を訪ね歩き、いまここに初めて「登戸研究所の真実」を記録した長篇ドキュメンタリー映画が完成した。カメラの前に立った証言者40数名の勇氣と、語り継ぐ決意が結晶となった作品となった。

問合せ (03)3969-3876 (楠山) / asiadispatch@gmail.com

プロデューサー・監督・編集・楠山忠之
撮影・新井愁一・長倉徳生・鈴木孝耶・楠山忠之
録音・渡辺路子
編集技術・長倉徳生
朗読・石原たみ
聞き手・石原たみ・渡辺路子・宮永和子・楠山忠之
ナレーション・楠山忠之
ムックリ演奏・宇佐照代(アイヌ料理「ハルコロ」)

9月8日(土)

4時間版完成記念特別上映会(当日券一律1500円)

共催: 明治大学平和教育登戸研究所資料館
アジアディスパッチ&陸軍登戸研究所映画製作会

明治大学駿河台キャンパス・リバティタワー1022号室

開場: 午後1時 / 解説: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 館長 山田朗教授 午後1時半 / 上映「陸軍登戸研究所」(240分カラー) 途中休憩有り / 終映予定6時